

自分が、上野で理科の教員として授業をしていたころ、いかにわかりやすく、いかに面白く、学力テストで高得点が取れるよう、奮闘していました。部活動が終わって夜遅くまで授業準備、実験レポートの評価をし、土日も部活動や教材研究、ミニテストづくりに明け暮れていました。今の時代、教員としての働き方としては不適切にもほどがあるとお叱りを受けるのですが、校内研究を進めながら、あの時の子どもたちの笑顔や教師としての充実感を思い出します。

自分の教え方に疑問をもったのは、学校が荒れてきた、そんなときでした。担任の私の授業では、しっかり学ぶ子どもたちです。しかし、他の先生の授業では、いうことを聞かず、良い態度で受けられませんでした。始めは、その担当の先生の指導力のなさに原因があるのではと思っていましたが、自分がいなくとも、卒業しても、自分だけでしっかりと授業が受けられる子どもに育てなければ、自分の教育の成果として十分ではないと思うようになりました。子どもが自ら学ぶ、自律した学びの必要性を感じ始めたのは、そんなときでした。

現在、私は、品川区立伊藤学園という義務教育学校の校長を務めており、今年で2年目となります。伊藤学園は、多くの日本の学校から見れば少し「特殊」な学校です。前期課程（小学校課程）と後期課程（中学校課程）を合わせて944名の子どもたちが1つの校舎で学びます。教職員はおよそ70名、教職員以外の大人の方を含めると100名以上が子どもたちの教育に関わっています。校長としてこれだけの大きな学校をコントロールするには、9年間を通じた画一的な教育活動が安心だと考える気持ちは理解できます。しかし、子どもたちがこれからの将来、本当に必要な資質と能力を9年間かけて育てるには、自律した学び、すなわち「興味・関心や能力・特性に応じ、子ども自身が調整して進める深い学び」を身に付けていくことが重要です。これまでにない多様な学びや生活を真に認めることも必要です。そのため、これまでの伊藤学園の学校風土や先生方の指導観、生徒の学びのスタイルの転換が必要だと考え、この校内研究をスタートさせました。

学校が新しく変わるためには、何が必要なのでしょう。それは、時代の変化とともに教育の目的を常に見直すことです。学校の当たり前を疑い、改善と検証を繰り返して、常に変化しながら前進する必要があります。これらの小さな改良が大きなイノベーションとなることを目指して、日々取り組んでいます。

この度、令和6年度品川区教育委員会研究学校としての研究をこの研究紀要にまとめました。令和7年12月19日の研究発表会に向け、伊藤学園の学びを、子どもが自律した学びになるようアップデートしていきます。

結びになりますが、本年度、ご講演、ご講評をいただきました、青山学院大学 教育人間科学部教育学科 教授 益川弘如先生、東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 准教授 登本洋子先生に心より感謝申し上げます。

2 校内研究の課題設定

(1) 主題設定にあたって

伊藤学園の多くの子どもは、静かにしっかりと教師の話聞くことができ、授業規律を守ってよく勉強している。板書をノートにきれいに書き写すことも得意である。この状況が2年前の伊藤学園の授業スタイルであった。ただ、子どもが学習の主体になっているかという疑問が残り、実は学んでいるように見えるだけなのではないかと思ったことが、この研究のスタートとなった。

PISA（OECD 生徒の学習到達度調査）2022 では、学校が再び休校になった場合に自律学習を行う自信があるか、という質問に対する回答で、自信がないと回答した生徒が調査国 37 国中 34 位と、日本は非常に多かった。この状況は、指示されたこと、教えられたことは学習できるが、自ら学び続けることができないという、いわゆる「やらされる学習」に慣れていて、かつ、それが学びだと錯覚していることを意味している。伊藤学園の多くの子どもと同様なのではないかと思うに至った。すなわち、感染症の流行や災害の発生といった非常事態だけではなく、変化の激しい、先を見通せない社会を生き抜く子どもたちが、毎日の日常から自律した学びに向かう資質・能力を育むことが我々の急務なのである。

これからの時代を生き抜くため、伊藤学園を卒業後、大人になっても生涯学び続けるための基盤となる「自ら学びに向かう資質・能力」を身に付けるため、自律した学び、すなわち「興味・関心や能力・特性に応じ、子ども自身が調整して進める深い学び」の育成を大目標とした。本校の義務教育学校という強みを生かし、第1学年から第9学年まで系統性をもたせ、研究主題「義務教育学校における自律した学びと教師の支援」を設定した。

(2) 自律した学びに必要な資質・能力と授業デザイン

本校では、子どもの「自律した学び」に必要な5つの資質・能力を以下のように定義した。

①自己調整力

自分の学習計画をたて、それを実行する力

②探究的な見方・考え方

自ら課題を設定し、探究のプロセスを通じて解決する力

③批判的思考力

情報を単に受け入れるのではなく、その妥当性、信頼性、論理性を慎重に検討する力

④コミュニケーション力

他者と効果的に意思疎通を図り、相互理解を深める力

⑤情報活用能力

情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用し、様々な問題を発見・解決し、自分の考えを形成していく力

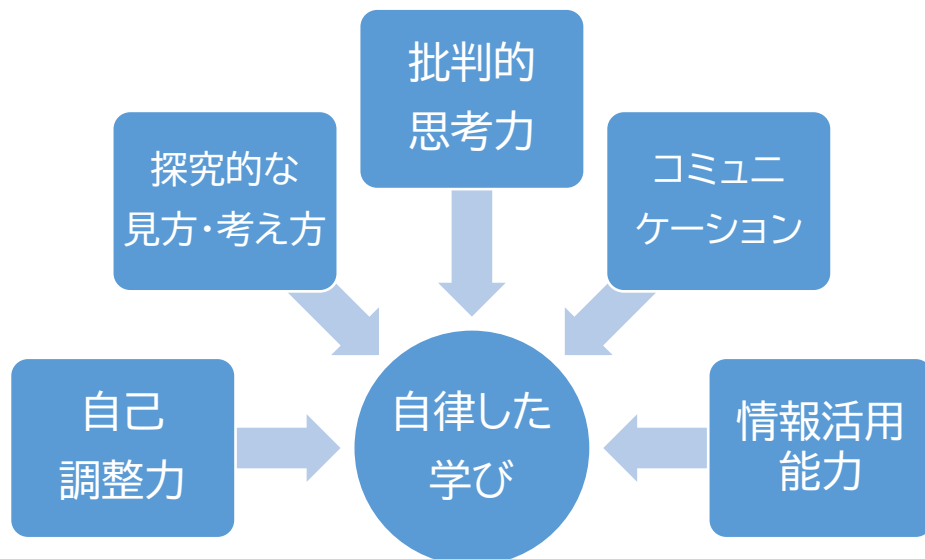


図 自律した学びの育成に必要な5つの資質・能力

これらの自律した学びに向かう5つの資質・能力を育成するための授業デザインを次の6つの視点に分けて整理した。市民科を含めた各教科において、教師が1人1本の研究授業で実践し、その検証を行った。

①学習の個別最適化

子ども一人一人の特性・学習進度・学習到達度等に応じ、教師が必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行う。

②協働的な学び

子ども一人一人のよい点や可能性を生かし、子どもや大人など、多様な他者と協働することで異なる考え方が合わさり、よりよい学びを生み出す。

③学習の体験活動

具体的な活動や経験を通して、子どもの主体的な学びを身に付け、学ぶことへの楽しさや課題解決への成就感を体得させる。

④学習の客観化（評価）

子どもが自ら学習を進めていけるよう「この授業で何を学ぶのか」という到達目標を明確にし、振り返りシート等を活用して、子どもも教師も常に学びを振り返りながら学びを調整して進めていく。

⑤教師の支援（ファシリテーターとして）

子どもが学習の主体者として、主体的・意欲的に活動し、課題解決に向けた取組が行われるよう、ファシリテーターとして、内発的動機付けにより、子どもの学びに向かう力を促進し、必要に応じて知識・技能を提供する。

⑥学習環境の構造化

子どもが学習課題に自律的に取り組ませるために、一人一人の学習活動を見越して教室やオープンスペース、ICT等の学習環境を有効に活用し、必要な学習材や器具類を意図的、計画的に整備する。

3 今年度の校内研究の取組について

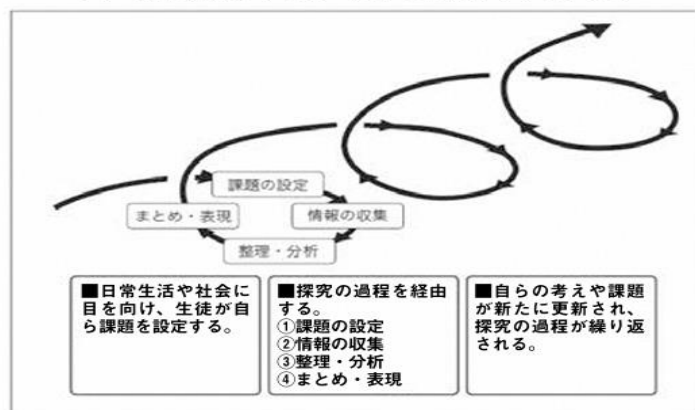
教職員数が70人と多い中、効率的に校内研究を進めるために、教科毎に分科会を設定し、1人1本の研究授業を行った。また、学習指導案も簡略化し、誰もが簡単に作成できるものを使用した。

(1) 各教科の取組

各教科では、探究的な学びのサイクル（図 探究的な学習における生徒の姿）を取り入れ、各教科の目標に到達できるようにした。学習指導要領において、探究的な学習は小・中学校の多くの教科の中にも明確に取り入れられている。例えば、保健体育科においては、「運動や健康についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う」（中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編）と記されているし、算数・数学科における数学的活動では、「自ら問題を見だし、解決するための構想を立て、実践し、その過程や結果を評価・改善する機会を設ける」（中学校学習指導要領（平成29年告示）数学編）こととされている。

探究的な学習では、「探究の過程」（プロセス）が重要な意味をもつ。探究の過程とは、①日常設定や教科内容の学習を通して課題を見つける（課題の設定）、②課題を追究する過程で様々な情報を収集する（情報の収集）、③その情報を整理することで精査したり、考えを交換しながら分析したりして問題の解決に取り組む（整理・分析）、④取組の成果をまとめ、他者に向けて表現する（まとめ・表現）といった学習活動を繰り返すことが大切である。ただ、①～④を必ずしも順番通り実施せねばならないものでもない。

図 探究的な学習における生徒の学習の姿



参考(文部科学省 小学校学習指導要領（平成29年度告示）

【総合的な学習の時間編】解説 p.9)

本校でも、児童・生徒が課題を設定した後、情報を収集しているうちに新しい課題が生まれたり、成果をまとめながら情報を整理し直したりすることがあった。4つの「探究の過程」の中では、特に「課題の設定」が重要であることがわかった。課題が児童・生徒の意識に根づくことができれば、その後の探究の過程は自然に流れていく。「課題の設定」の課題に相当するのは、授業の最初に示す本時の学習課題や教科書の単元の冒頭に示されている問いのことであり、本校では、教師が本時

の学習課題をただ板書するのではなく、児童・生徒に「なんでだろう」「どうしてだろう」と思うように発問や資料などの提示の工夫を行い、課題の出合わせ方に力を入れた。

(2) 探究的な学び6プラン

自ら学びに向かう資質・能力を身に付けるため、各教科や学年の特性により「これからの授業デザイン」を明らかにし、体験学習や問題解決学習、探究活動等を基盤とした授業実践を行った。研究主題に迫るための手だてを「探究的な学び6プラン」として以下のように定め、校内研究のポイントとして研究を進めてきた。

○これからの授業デザイン（探究的な学び6プラン、伊藤学園の教科指導と「いとたん」で共通のもの）

<p>(1)学習の個別最適化 「個に応じた指導の工夫、主体性」 子どもを学習者の主体として正面にとらえ、真に子ども側に立った指導計画を作成する。 ◆多様な形態や活動を取り入れる。 →自由進度、課題選択、個人差の対応 ◆効果的な指導体制を導入する。 →学級TT、学年TT、少数数指導(均等、習熟) ◆地域人材の位置付け→外部指導員、ボランティア</p>	<p>(2)協働的な学び 「聴き合い、相互理解、意見交流」 単にペアやグループを作っただけでは子どもの学びは協働的になるわけではない。他者を尊重し、成長を自覚し、新たな知を創造する機会を確保する。 ◆「話し合い」を「聴き合い」と替えて、他者の話を聴き、それを返す力や姿勢を育てる。 ◆分からないを認める学級風土の醸成 ◆ディベート、多様なグループワークの導入</p>	<p>(3)学習の体験活動 「体験活動と探究的な学びの連動」 子ども自身が対象物に直接働きかけ、見たり、触れたりする体験活動(観察・実験・実習・作成)は、子どもに主体的な学習の仕方を身に付け、学ぶことの楽しさや成就感を体得させる。 ◆明確な目的を伴う体験活動の位置付け →具体物による計算、学習材など ◆体験活動の事前学習、事後学習の充実</p>
<p>(4)学習の客観化(評価) 「メタ認知力、自己評価力」 評価は一人一人のよさを見だし伸ばすという評価観に立ち、子どもの興味・関心やつまずきを教師と共有し合い、適切に対応する。 ◆指導と評価の一体化 → 形成的評価、振り返り ◆変容をみる1枚振り返りシートの作成</p>	<p>(5)教師の支援(ファシリテーターとして) 「指導から支援へ」 子どもが学習の主体者として、主体的・意欲的に活動し、問題を解決する授業への改善を推進する。 ◆主体性や学習意欲を引き出す動機付けの工夫 ◆教師の協働→教科担任制、OJT ◆ICTや1人1台端末の多様な活用</p>	<p>(6)学習環境の構造化 「学習意欲を引き出す環境変化」 子どもが学習課題に意欲的に取り組むには、教室やオープンスペースを有効に活用し、必要な学習材や器具類を意図的・計画的に整備する必要がある。 ◆座席に縛られない、活動場所の工夫 ◆一人一人の探求活動を見越した学習環境の整備</p>

伊藤学園中学校区一貫プラン構想図 伊藤学園

(3) 市民科一貫プランの取組

ア 市民科一貫プランについて

市民科は、品川区の教育改革プラン21の推進に伴い新設した品川区独自の教科である。その中でも一貫プランは、市民科学習とは別に、第3学年以上で年間35時間ずつ、児童・生徒や地域の実態に合わせて各学校の特色を生かす教育活動である。

以下の①～③を本校中学校区のテーマとしており、近隣の大井第一小学校、山中小学校と共有して取り組んでいる。

- ①人とのかかわり
- ②地域とのかかわり
- ③自分とのかかわり



イ 伊藤学探究「いとたん」について

本校の市民科一貫プランでは、今年度より、自律した学びの育成を目指した探究活動である、伊藤学探究（通称いとたん、以下いとたんと呼ぶ）に取り組んでいる。

いたとんでは、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指した。

- ① 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- ② 実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- ③ 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。
- ④ 情報活用能力について、探究活動と教科間で横断的・総合的な学習を行うことを通し、義務教育学校における系統的、計画的な育成を図る。

ウ 各学団の取組概要

低学団（第3、4学年）は、クラス単位で地域の施設を調べ、課題を見つけ自分にできることを考えた。中学団（第5、6、7学年）は、児童・生徒の興味・関心がある教科ごとに異学年混合の小グループを作り、ゼミ形式で探究活動を進めた。高学団（第8、9学年）も中学団と同じく異学年混合のゼミ形式だが、教科ではなく、自身のキャリア設計に基づいた将来の職業に結びつくジャンルを生徒が選び、ジャンルごとに小グループに分けた。

そして、それぞれの学団のめざす子ども像を発達段階に合わせ、系統性をもたせて、以下の通り設定した。

学団(該当学年)	めざす子ども像
低学団 (第3、4学年)	課題に向き合い、学んだことを生かしてあきらめずに解決しようとする子
中学団 (第5、6、7学年)	課題に向き合い、互いの良さを認め合いながら、次の学びにつなげようとする子
高学団 (第8、9学年)	課題にねばり強く向き合い、協働することによって自らの理解を広げ、社会に参画しようとする子

また、自律した学びおよび市民科一貫プランのねらいである、「社会や地域とのかかわりや貢献」が最終ゴールであると明確に意識させるため、いとたんの中に、どの子どもも、それぞれの課題に向かって自分ができること（行動宣言）を設定した。そして、いとたんの中に行動宣言報告会を設け、行動宣言の具体的なプランを作成して自分から外に向かって発信し、プラン実現に向けた意欲を高めた。

行動宣言の例

学団(該当学年)	行動宣言
低学団 (第3、4学年)	施設(野球ショップ)を調べ、野球を下級生に広めるために自分が施設で実際に働く体験をし、野球の良さや奥深さを学び、新聞を学校に掲示する。
中学団 (第5、6、7学年)	日本の投票率が低いことから、児童・生徒に選挙に興味をもってもらえるように、校内の選挙方法を変えるよう提案する。
高学団 (第8、9学年)	家でよく余っていると考えられる食材を使用したレシピをポストカードに書き、地域の方に配布することで、フードロス防止につなげる。

(3) 情報活用能力の育成

ア 東京都情報活用能力育成研究校としての取組

本校は、東京都より、令和6、7年度情報活用能力育成研究校の指定を受け、研究を進めてきた。情報活用能力とは、世の中の様々な事象を情報とその結び付きと捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくための必要な資質・能力である。本校は、都教育委員会と協議の上、次の①～④についての研究を行った。

- ①新版「情報活用能力とうきょうモデル」の作成
- ②都教育委員会で作成したデジタル教材の実践事例の作成
- ③情報活用能力の年間指導計画例及び実践動画(5分程度)の作成
- ④その他、課題に応じた研究

また、1年間で計6回の研究校連絡会を通し、研究、実践の成果の普及・啓発として、次の①～③を行った。

- ①自校における情報活用能力育成に関する研究・実践の成果について他校への普及・啓発に努めた。
- ②都教育委員会が開催する「デジタル利活用推進教員育成研修」において、自校における研究成果を発表した。
- ③研究成果は、都教育委員会が管理するウェブサイト公開した。

イ 9年間を見据えた系統的な情報活用能力の育成

本校では、情報活用能力を、自律した学びに必要な一要素として位置付けて研究を行った。そして、情報活用能力の育成を、探究の過程(課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現)を生かした探究活動の中で育成することが効果的であると考えた。東京都の情報活用能力#東京モデル Ver1.0を基に、本校の探究活動の年間計画に沿って育成される情報活用能力を以下のように整理した。

	探究活動の内容	育成される情報活用能力
第1次 (収集)	興味関心があることについて、詳しくなっていく過程で疑問に思うことや解決したいことを絞る。	見通し 収集
	疑問に思うことや解決したいことについて自分にできる行動を、以下の行動宣言の項目①～⑤に沿って考える。 ①行動のタイトル ②行動の概要 ③行動の対象 ④具体的な行動の内容 ⑤協力したい人	見通し 収集 整理 分析 批判的思考 創造的思考
第2次 (編集)	行動宣言報告会に向けて、必要なスライド等を準備する。	整理 表現
	行動宣言報告会を行い、聞き手からのコメントを受けて、今後やらねばならないことをリスト化する。(行動宣言報告会)	表現 分析 協働 改善 批判的思考 創造的思考 自己調整
	行動の実行に向けて準備する。 進捗状況を報告したり、困っていることを相談したりする。 (進捗状況報告会・相談会)	分析 表現 発信 協働 改善 批判的思考 創造的思考 自己調整
第3次 (発信)	行動宣言の実行をする。	発信 改善 自己調整
	最終発表に向けて、まとめる。	整理 表現
	自分が行ったことを発表し、今後の活動方針を伝える。	表現 改善 見通し 批判的思考 創造的思考 自己調整

また、義務教育学校9年間を見据え、系統的計画的に育成を図る必要があるため、本校独自の情報活用能力育成のための指導項目リストを作成している。リストは4観点をGradeⅠ～Ⅲに分けて整理し、教員が第1学年から第9学年までの「情報活用能力を育成するために身に付けるべき資質・能力」を系統的に把握できるよう視覚化した。

観 点	GradeⅠ (第1～3学年相当)	GradeⅡ (第4～6学年相当)	GradeⅢ (第7～9学年相当)
1 基本的な操作	<ul style="list-style-type: none"> ①語句を五十音表から、正しく入力することができる。 ②目的に応じてアプリケーションを選択し、操作ができる。 ③クリック・ドラッグなどのコンピュータ操作ができる。 ④タップ・フリック、写真撮影などタブレット操作ができる。 ⑤文字の入力は、ひらがな五十音表を使って入力できる。 ⑥アプリの開き方・閉じ方が分かる。 ⑦基本的なロイロノートの使い方が分かる。(テキストの入力、アンケートの活用、担任から送られた資料の活用) ⑧マイフォルダと共有フォルダのちがいが分かる。 ⑨目的に応じてアプリケーションを選択し、操作ができる。 ⑩アンケートなどの集計に表計算ソフトを利用したことがある 	<ul style="list-style-type: none"> ①全角・半角・ひらがな・英数字等が混ざった文書を正しく作成できる。 ②写真を(具体的なクラウド名)に整理して保存することができる。 ③指定されたフォルダにファイルを保存することができる ④指定されたファイルを別のファイルに変換できる ⑤エクセルやスプレッドシート等の表計算ソフトを活用して、合計や平均値を求めることができる。 ⑥フォルダを作って、データを整理することができる。 ⑦文字の大きさを変えることができる。 ⑧アンケートなどの集計に表計算ソフトを利用して、合計や平均などの値を求めることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ①ホームポジションを理解し、スムーズにタイピングができる。 ②Excelで共同編集をすることができる。 ③新しいフォルダの作成、バックアップの作成等、データを管理することができる。 ④PowerPointを利用して、自由にスライドを作成できる。 ⑤Wordを利用して、矢印や強調等、工夫した文書を作成できる。 ⑥クラウドに整理してデータを保存することができる。 ⑦他人にもわかりやすくフォルダの階層を適切に設定できる。 ⑧与えられたポスターを、文章・フォント・図表・デザインの観点でより良く改善できる。 ⑨表計算ソフトで表を作成し、適切なグラフの種類を選び作成することができる ⑩アンケートなどの集計結果を、見やすく編集したり、適切なグラフを選択して示すことができる。 ⑪誰もが活用しやすいようにデータを整理・保存することができる。

観 点	Grade I (第1～3 学年相当)	Grade II (第 4～6 学年相当)	Grade III (第 7～9 学年相当)
2 情 報 の 活 用	<p>①調べたい語句を入力して、ウェブ検索ができる。</p> <p>②ウェブ検索で画像を取り出せる。</p>	<p>①調べた情報を比べて、大事なところを要約できる。</p> <p>②複数の条件に応じて、情報を選択し、見いだした特徴を基に分類できる。</p> <p>③発表用資料を作成するときに、必要に応じて図や表、グラフで表すことができる。</p> <p>④分類した情報を比較し、わかることをまとめることができる。</p> <p>⑤目的に合った情報を得るために、適切なキーワードを使い、検索することができる。</p> <p>⑥調べた情報を比べて、大事なところを要約できる。</p> <p>⑦複数の条件に応じて、情報を選択し、見いだした特徴を基に分類できる。</p> <p>⑧プログラミングソフトを使って、指定された画像を自由に動かすことができる。</p> <p>⑨プログラミングソフトで組み立てた事柄を、フローチャートで表すことができる。</p> <p>⑩あらゆる情報から必要な情報を選んでまとめることができる。</p>	<p>①メディアの情報には、発信者の意図が含まれていることを理解した上で利用できる。</p> <p>②目的や情報の種類に合わせたアプリケーションを選択し、利用することができる。</p> <p>③効果的な情報検索をして、情報が正しいか検証することができる。</p> <p>④表を3種類以上の条件をもとに並び替え、データを取り出すことができる。</p> <p>⑤ポスター作成の際に複数の案を用意し、状況に最も適したものを選ぶことができる。</p> <p>⑥ウェブ上の文章を的確に要約し理解するとともに、他人に教えることができる。</p> <p>⑦比較対象を探し出し、信憑性を高めたデータを作成することができる。</p> <p>⑧ワークフローを作成し、各グループの進捗状況を把握することができる。</p> <p>⑨複数のグラフを読み取り、矛盾した部分を改善案につなげることができる複数のグラフを読み取り、矛盾した部分を改善案につなげることができる。</p> <p>⑩目的に応じて情報を、図、表、グラフに示すことができる。</p> <p>⑪信頼できる根拠を選択できる/データの矛盾点を指摘できる。</p> <p>⑫情報源の信憑性を判断し、根拠として活用することができる。</p>

観点	Grade I (第1～3学年相当)	Grade II (第4～6学年相当)	Grade III (第7～9学年相当)
3 情報の科学	<ul style="list-style-type: none"> ①グラフや表から必要な情報が読み取れる。 ②グラフや表から指定された情報を読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①比較しながら情報を整理することができる。 ②調べた情報を統合して整理することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①引用するサイトの信頼性を見極め、他のサイトと比較して判断することができる。 ②目的に応じて、情報の傾向や変化を見つけることができる。 ③情報を統合して理論立てて考え、新聞やプレゼンテーションにまとめることができる。
4 情報モラル・情報セキュリティ	<ul style="list-style-type: none"> ①IDとパスワードの重要性を理解している。 ②大切なデータにパスワードをかける必要があるのか理由を言える。 ③タブレットで写真を撮るときは、人を入れないように気を付けて撮ることを理解している。 ④友達のタブレットを勝手に見えてはいけないことを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ①自分の情報を守ったり、健康に留意したりしながら情報端末を使うことができる。 ②パスワードを適切に設定し、管理することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①SNSなどの使用について、内容が適切かを考え、自分の責任や義務を踏まえて行動できる。 ②撮影の目的を理解し、撮影した写真を管理できる。 ③情報の有用性を理解し、適切に活用できる。 ④一般にパスワードを設定したファイルに保存される情報を5種類以上言える。 ⑤情報発信の際に、著作権や肖像権を理解したうえで正しく発信することができる。

情報活用能力育成のための指導項目リスト(令和6年度現在)

このリストを作成するにあたり、まずは次の①、②を全教員が理解し、児童・生徒が身に付けるべき資質・能力を各学年から聞き取り、集約した。

①情報活用能力の定義

情報活用能力は、言語能力、問題発見・解決能力等と同様に、学習の基盤となる資質・能力。その育成に当たっては、各教科の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図る。情報活用能力をより具体的に捉えれば、学習活動において必要に応じてコンピュータ等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりといったことができる力であり、さらに、このような学習活動を遂行する上で必要となる情報手段の基本的な操作の習得や、プログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計等に関する資質・能力等も含むものである。

② 想定される学習内容と分類

想定される学習内容	分類
基本的な操作	キーボードの入力やインターネット上の情報の閲覧など、基本的な操作の取得に関するもの等。
情報の活用	問題を解決するために必要な情報を集め、その情報を整理・分析し、解決への見通しをもつことができる等、問題解決・探究における情報活用に関するもの等。
情報の科学	問題解決のためにどのような情報を、どのような時に、どれだけ必要とし、どのように処理するかといった道筋を立て、実践しようとするもの等や、単純な繰り返しを含んだプログラム作成。
情報モラル・情報セキュリティ	SNS、ブログ等、相互通信を伴う情報手段に関する知識及び技能を身に付けるもの（育成する場面）や情報を多角的・多面的に捉えたり、複数の情報を基に自分の考えを深めたりするもの等。

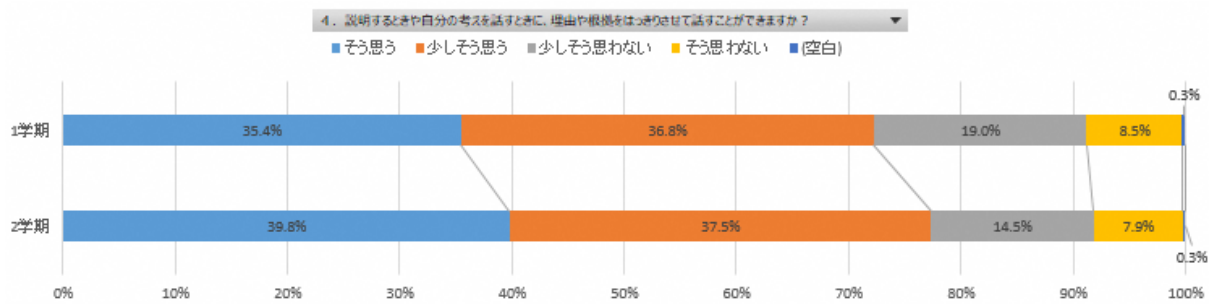
来年度の研究に向け、第1～3次の活動「収集、編集、発信」を「検索」「収集」「整理」「表現」「記録」等の項目に適切に細分化し、身に付けるべき資質・能力について学校全体で共通認識を図るとともに、児童・生徒が自らの資質・能力を振り返るチェックリストとして運用できるよう工夫する。

(4) 成果と課題

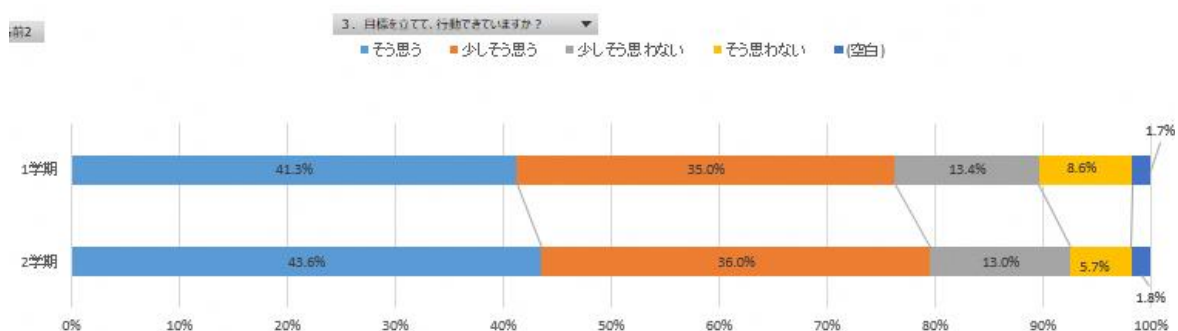
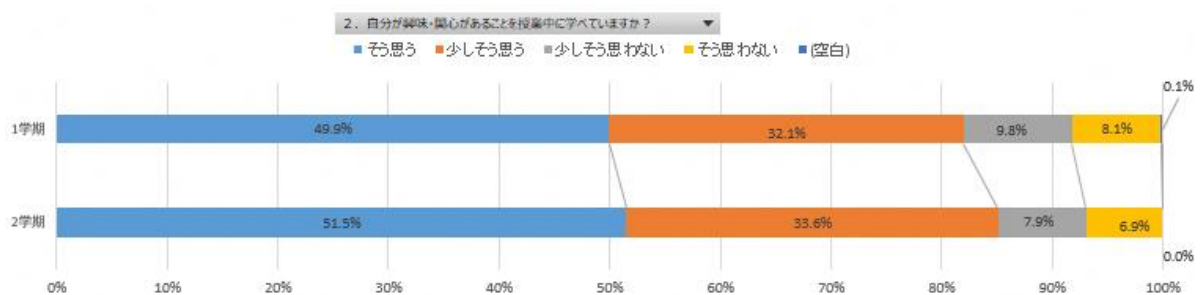
ア 成果

「みんなで学び合うことは、自分の学習が深まることにつながると感じますか」について1学期と2学期に調査したところ、肯定的回答の割合が89.3%から90.1%へわずかに増加した。また、「説明するときや自分の考えを話すときに、理由や根拠をはっきりさせて話すことができますか」についても、72.2%から77.3%に増加した。このことから、各教科や市民科一貫プランの中で探究的な学び6プランの(2)協働的な学びの機会を多く取り入れたことが有効であったと考える。

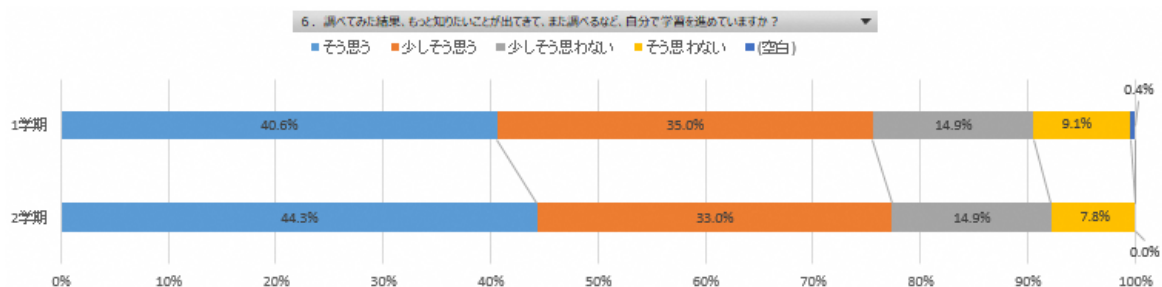




「自分が興味・関心があることを授業中に学んでいますか」について1学期と2学期に調査したところ、肯定的回答の割合が82%から85.1%に増加した。また、「目標を立てて、行動できていますか」についても76.3%から79.6%に増加した。このことから、各教科や市民科一貫プランの中で探究的な学び6プランの(1)学習の個別最適化(4)学習の客観化(5)教師の支援(6)学習環境の構造化等の手だてが相互に作用したことで出た結果と考えられ、有効であったと考える。



「調べてみた結果、もっと知りたいことが出てきて、また調べるなど、自分で学習を進めていますか」について1学期と2学期に調査したところ、肯定的回答の割合が、75.6%から77.3%に増加した。このことから、各教科や市民科一貫プランの中で探究的な学び6プランの(3)学習の体験活動の手だておよび探究的な学びのサイクルを各教科および市民科一貫プランで取り入れてきたことが有効であったと考える。



イ 次年度の課題

- ・肯定的回答が8割に満たない、「調べてみた結果、もっと知りたいことが出てきて、また調べるなど、自分で学習を進めていますか」、「説明するときや自分の考えを話すときに、理由や根拠をはっきりさせて話すことができますか」の設問が8割に到達するように、探究的な学びのサイクルの充実および協働的な学びの充実を図っていく。
- ・市民科一貫プランの仕組み上、1、2年生が伊藤学探究を実施できなかったため、来年度は、1、2年生の生活科の学習が市民科一貫プランにつながるよう計画をする。
- ・探究的な学び6プランを取り入れた授業実践では、協働的な学び生かした授業デザインが多かった。教科の特性を生かした授業デザインの実践を進めるとともに、子どもの深い学びに繋がっているのかどうか、検証する必要がある。
- ・情報活用能力育成のための指導項目リスト（令和6年度現在）について検証はできていない。9年間を見据えた系統的な育成を踏まえ、リストを完成する必要がある。
- ・自律的な学びの育成に必要な5つの資質・能力のうち、「探究的な見方・考え方」と「情報活用能力」には取り組めたが、「自己調整力」「批判的思考力」「コミュニケーション」の取組は十分でなかった。これら取り組めなかった3つの資質・能力について、研究実践を積み重ねる必要がある。

